

留学生 Eyes

驚きが
いっぱい
北海道の冬。



シャイレッシュ・クリシュナさん
(名) (姓)

小樽商科大学大学院商学研究科2年
インド出身

私は1999年10月に日本にきました。ちょうど冬になろうとしているところでした。日本についているいろいろな思いを抱きながらやって来ました。私は、札幌の外国人留学生用の宿舎に宿泊して一安心しました。なぜなら、それまで日本語が全く理解できなかったから。

冬になってしばらくしたある日の朝起きてみると、窓の外は真っ白でした。前日にお酒を飲んだために頭がぼーとしていたので、インドの綿花畑ではなくて雪であるということがわかるまで暫く時間がかかりました。酔いも醒め、頭から足の先までしっかり身支度をしても、一面に広がる雪の中に思い切って出て行くことはとても勇気のいることでした。学校に行くまでも、息

をするのが大変でした。口や鼻などあらゆるところから雪が入ってきて、まるで息が出来ないような状態でした。

北海道の冬は「寒い」という一言で片付けられるようなものではありません。インド人の骨まで凍らせるほどの寒さだったので、外国人と一緒に北海道で最も「暖かい」場所とされているススキノに行くしかありませんでした。ススキノは真冬の夜遅くでも、人々がショートスカートを、そうです、本当に短いショートスカートを着ているのを見るほど暖かい場所なのです。そして、ショートスカートを身に付けている人は少女ばかりではないのです。彼女達を見ると、テレビの天気予報でいうほど実際はそれほど寒くはないのだという気がします。

日本には、芯まで凍った体を温めてくれる場所が他にもあります。それは、お風呂(銭湯)です。銭湯は雪に圧倒されたインドの人達にとって最も素晴らしい場所の一つです。もし、奨学金を現在の金額の2倍いただいていたなら、冬の間銭湯で過ごしたいと思います。しかし、最初に銭湯に行ったときはショックを受けました。多くの人が私のことを見ていると思うと、暑いインドの夏を懐かしく思う体にとっては何も良いことはないと感じました。私は、脱衣室で暫くのあいだ辺りを見回しながら

立っていました。そして、間違いなく誰も私のことを見ていないと思ったときにお風呂に入る準備をしました。お風呂に入っているあいだ中、体を硬直させていたので、北海道の寒さで凍った体の調子は前よりも悪くなった感じがしました。日本の銭湯の暖かさを実感するには暫く時間がかかりました。

その当時、冬を乗り切ることだけを考えで生活していましたが、ちょっと危険を冒してみたくなり、誰かが「冬のお寿司は美味しい」と教えてくれたので、お寿司が初めての人達ばかりで、地元のお寿司の中心地である小樽に向かいました。もちろん、その当時お寿司のことについては聞いたことがありませんでしたが、実際にお寿司を見る機会はありませんでした。インドでも魚は食べますが、種類はそれほど多くはなくもちろ人生では食べません。ですから、回転寿司のベルトにのせられているお寿司を見たときには、本当に凍りつくほど驚きました。私はたまごののった寿司しか食べることができず、お腹の中はまるでオムライスでいっぱいになったかのようでした。

日本での最初の冬はこのような出来事ばかりで、インド人の私が熱い味噌汁に慣れるのは大変でしたが、慣れると心も暖かくなり、暑い故郷に近づいた気持ちです。

特集2：国際交流

現在商大では、世界各国からの留学生が増え、より一層国際化が進んでいます。外国から日本へ、日本から外国へと新しいネットワークはどんどん広がっています。

留学 体験記

感動の
連続だった
ドイツでの
体験。



葉山 美恵さん 商業教員養成課程4年
1999.8 ~ 2000.3
ドイツ(パイロイト大学)へ留学

今回の留学は私にとって「感動」の連続であった。それは真夏の8月、初めてドイツの地に足を踏み入れた瞬間から帰国する3月まで絶えることなく、むしろ多くの人との出会いを重ね、また数知れない新しい発見をしているうちに、その感動の度合いが増していったような気がする。最初は目による感動が大きく、それまで本でしか見たことがなかった風景を実際目の当たりにし、そこから日本とは異なった歴史の歩みやおとぎ話を連想させるようなドイツ独特

の趣がひしひしと感じられた。

私にとって小さい町の駅が特に思い出深く、パイロイトでは8月頃、ワグナー音楽祭のため街中は一変して賑やかとなる。駅でも演奏が行われ、それで長い旅の疲れが一気に癒されたりもしたのである。こうして列車の旅を頻繁にしていた私は日本のシステムとのちょっとした違いが面白く感じ、例えばドイツに限らずヨーロッパ全体では列車の改札がなく、見送る場合でも自由にホームまで行くことができるのだ。車掌は後から車内をまわって来るが、これは意外とドイツにしては効率悪いようにも思えた。それは、何事も効率良くやるのがドイツと決め付けていたからだ。実際その合理的なやり方は常に無駄を省き、まさに環境先進国として世界の手本になっていることはもう言うまでもない。

私は寮生活においてゴミの正しい分別を覚えるのにひと苦労した。周りを見ると皆当たり前のように空き瓶などを各地域毎の専用大型コンテナに持って行き、またお店に返せるものは返して瓶代を払い戻してもら

っていたのだ。街を歩いていても買い物専用のかごを持っている人をよく見掛けたが、これは日本と違って買い物袋が有料となっているためである。住民の間で環境意識をあらゆる方向から高めようとする動きが活発化しており、私には実行力のあるドイツは悪く言えば頑固、良く言えばかたい信念をもった、徹底した国のように印象付けられたのである。

この国ではとりわけ人の思いやりが厚く感じられた。困った人がいれば、迷わず手を掛け、自然に手を出す、そんな思いやりだ。またドイツ人は素朴であるだけにとっても誠実である。これらを決定的に証明したあるハプニングが起ったので紹介しよう。

私の友人が日本から遠く遊びに来て、たまたまパスポート、現金などが入っていた貴重品袋をバスの中で忘れた時、パイロイトの場合は中身も全部そのままの状態で見つけたのである。この小さな事件はこれまでにない感動ドラマとしていつまでも私の心に残ることだろう。